

体育的学力の向上を目指した授業の構想

～ボール運動ゴール型ゲームを中心とした認識学習～

清水茂幸・清水将*，根木地淳・松村毅・菅原純也**，加賀智子・高橋走***

*岩手大学，**岩手大学教育学部附属小学校，***岩手大学教育学部附属中学校

(平成 26 年 3 月 7 日受理)

1. はじめに

体育科の学習内容を明確にして学習内容の習得を目指す指導要領がスタートしてから3年が経過した。その中で、体育的学力の確実な習得・向上を目指し、実践が重ねられてきている。

学習指導要領では、ボール運動が他領域に比べて大きな改善が見られた。

従来の種目ベース（バスケットボールやサッカーなどの種目を教える）から型ベース（動き方（型）を類型化し、共通する動き方が表出するゲームを通して、動き方を教える）に変わっている。「バスケットを学ぶ」学びから、「バスケットで学ぶ」学びへの変革であり、バスケットで学べばサッカーやハンドボールなど、類縁性のある運動に転移応用できる学びであるともいえる。

このような改善が見られたボール運動について、岩手県内の先生方を集めた授業研究会や講演会、実技講習会において、アンケート調査を行った。その中で、以下のような回答が多数あった。

- ・種目を教えない場合、ボール運動で何を学ばせればよいのか分かりづらい。
- ・ボール運動の中で、特にゴール型ゲームではどのような力をつけさせるのか明確にできない。
- ・学習指導要領のボール運動に例示されているゲームが分からない。実際に体験したい。

これらの回答から、ボール運動についての変化は感じているが、実際に「何を」「どのように」指導してよいかということに対する戸惑いがうかがえる。

ボール運動は、子どもたちが好きな領域ではあるが、一生懸命取り組む反面、勝敗にのみこだわり、自分やチームの高まりを実感しづらい領域である。

例えば、器械運動のマットで側方倒立回転を学習する際、何度も側方倒立回転に取り組むことで、その動きの構造やコツなどを理解し、動きに表わすことができる。共通の構造やコツを理解していれば、その動きを仲間と見合いアドバイスをすることもできる。

しかし、ボール運動のゲーム場面では、ボールや仲間の位置が刻一刻と変化するため、学んだ場面と同じ場面が出づらく、そのまま当てはめて考えることが難しい。さらに、ゲームの様相もスピーディーなため、状況を適切に把握し、アドバイスすることも困難な児童が多い。その結果、「勝ったから今日の体育は楽しかった」「負けたからつまらなかった」といったような、学びのない体育授業になってしまう傾向がある。特に、ゴール型では、攻防が入り乱れるために、ゲームの構成要素が多く、瞬間で様々なことを認識することができない。「わかる」（思考・判断）があるからこそ、生涯を通じて豊かなスポーツライフを送れるのであって、このままでは「できる」（技能）に偏った体育の学びになってしまう恐れがある。

このような実態から、体育的学力の向上を図るため、ボール運動のゴール型から迫ることにした。その際、体育的学力を構成するものの中から、特に思考に着目し、認識能力（どこに動けばよいのか、どう動けばよいかなど）を中心に授業を構想していきたい。

2. 方法

本プロジェクトでは、附属小学校、中学校を中心に各地域にある、体育学習会と連携を図りながら進めていく。具体的には、以下のような方法で進めていく。

- 各地区学習会との連携を図りながら、体育的学力についての検討・実践を重ねていく。
- 体育的学力についてボール運動ゴール型の授業研究を開催する。
- 岩手体育学習会集会を開催(授業研究会や講習会を含む)し、意見の交流を図る。

このプロジェクトを通して得た成果は、パンフレットとして、各地区の体育学習会を通して広げたいと考えている。

また、研究の推進にかかわって以下のような日程で行う。

- 5月 学部とのカンファレンス
- 6月 授業研究会(附属小)
- 8月 授業研究会参加
- 10月 第4回岩手体育学習会集会(附属小)
講師 筑波大学附属小学校 清水由先生
- 11月 授業公開研究会(附属小)
- 1月 学習会集会 冬の研究大会
講師
国士舘大学文学部 教授 細越淳二先生
演題
「体育授業を大切にしたい学級づくりの可能性～体育的学力とかかわって～」
実技講習会
「肯定的なかかわりをうむ、体育の授業づくり～ゴール型を中心に～」
パンフレット作成委員会
- 2月 パンフレット完成 各地区への配布
年間を通じて各地区での体育学習会の開催(およそ各月1回程度)

3. 結果

(1) 体育的学力とは

体育的学力を以下のように定義した。

運動に関心を持ち、意欲的に取り組んだり仲間と積極的にかかわったりし、規範的な態度を持ち運動に取り組む力。

場面に合わせて「からだ」の動かし方や「からだ」を移動させる動き方がわかる力。

場面に合わせて「からだ」の動かし方や「からだ」を移動させる動きそのものの力。

これらをバランスよく身に付け、場面に応じて発揮することのできる力。

(2) 認識学習について

認識(大辞林より)

物事を見分け、本質を理解し、正しく判断する。

この文言を体育的に考えると、以下のように分けることができる。

○物事を見分け

見分けるとは、情報を得て、自己の基準に照らしあわせ、その情報を整理分析すること。思考と取ることができる。

○本質を理解し

運動の本質を理解する。つまり、運動の構造やコツなどを正しく理解すること。

○正しく判断する

状況を適切に把握し、自己の動きや移動について判断すること。

学習指導要領における「思考・判断」と重ねて考えることができる。これらを踏まえ、体育における認識について以下のように考えている。

動き(動かし方と移動)を「観る」こと。

動き(動かし方や移動)を判断し「実行」すること。

(3) 体育的学力を明確にしたボール運動ゴール型についての授業実践

—奥のスペースを認識させる手立てを組み込んだアルティメットの授業実践—

①めざす子どもの姿

スペースへの動き方を理解しながら、スペースに動いたりパスを出したりし、仲間と共に勝利を目指す子ども。

②認識能力を高める工夫

- セットメニューで、スペースへの走り込みにつながる動作を取り入れることで、動きの素地を養う。
- タスクゲームを通して、スペースへの動き方を体感させる。
- フリーズゲームを用いスペースへの動き方を実際の場面で指導する。
- スペースへの動きを認識させるために、スペースへの動き方を記録する用紙を用いる。
- 観察者に、具体的な動き方をプレイヤーに伝えさせることで、自己の認識能力を高めさせる。

③指導にあたって

まず、単元を通して以下の3点に留意して指導する。

- 1) ゲーム場面を多く設定し、ゲームを通してボールにかかわる動きやボールを持たない動きを学んでいけるようにする。
- 2) ボールを持たない動き方が認識できるように、ゲームを同構造で難易度がアップしていくような進め方を取る。
- 3) 事前に人数が少ない状況で動き方を指導し、学びを転移応用させながら課題へと取り組ませたい。

単元全体を通して、ボール運動の特徴的な動きでもあるスペースへの動き方を身に付けさせるために、次の3点について留意して指導していく。

- 1) 正しい投捕の技能を身に付けさせるため、セットメニューで、投捕に関わる回数を多くする。(正しく投捕ができないと円滑なゲーム運営ができない)
- 2) 滞空時間を生かしたスペースへのパスやスペースへの走り込みの動きを認識できるように、奥のスペース(ディフェンスの後ろ)に走りこ

む動きを課題とし、その良さを考えさせたい。

その際、作戦表やフリーズゲーム、仲間からの声掛けなどを活用して視覚的に認識させる。

- 3) 3点目は振り返り場面では、学んだことだけでなく、個人やチームの課題を記載させたい。次時への課題を明らかにすることにより、その課題が次の出発点となり、学びの連続性が生まれると考える。

一横のスペースを認識させる手立てを組み込んだハンドボールの授業実践―

①めざす子どもの姿

投捕などのハンドボールに必要な基本的な技能を身につけるとともに、基本的な戦術を理解しチームの勝利を目指して仲間とともに動くことができる子ども。

②認識能力を高める手立て

- 個人やチームのめあてに向かって練習する時間を保証するために、1単位時間の中に簡易ゲームや話し合いを取り入れる。
- スペースが見つけれられない児童に対しては、ゲームの中でスペースを指示し、判断の手助けをする。練習ゲームの際にも個別指導を行う。
- コートを幅広く使うためにゴールの横も得点とする。また、ゴールの置き方も工夫する。
- 体育ノートを書かせることで、思考・判断について評価する。

③指導にあたって

単元を通して、以下のようなことに留意して指導する。

- 1) ボールを持って走る・投げる・捕るという基本技能や、ボールを持っていない時の動きをゲームで身につけさせていくとともに、チームで協力して動くことの楽しさを味わわせる。
- 2) みんなでルールを作っていくことにより、ルールを守り、互いに協力する心を育てていきたい。

3) 効率よく得点するために、サイド攻撃の動きを意識付ける。自然にサイドを使った攻撃ができるようにゴールの置き方を変えた。

4. 考察

本研究において、2本の研究授業を行った。その研究授業から明らかになったことを述べる。

(1) 可視化することの大切さ

ボール運動は再現性が低く、またゲーム進行も早いので、苦手な児童にとっては、動き方について理解しがたい領域であった。

そこで、本実践では動き方を可視化し、確認できる手立てをとった。この事により、動き方を自分事としてとらえ、スペースへの動き方やスペースへ動く有効性をとらえることができた。

また、可視化する方法としても、映像や作戦ボードを使う際、従来ならば俯瞰図を用いていたが、本来ゲーム中に見ている目線と違うため、それらが結び付かない児童も多かった。そこで、子ども目線の映像や作戦ボードを使うことにより、実際の場面と結び付いた認識をすることができた。

(2) 声援のしかた

体育の学習では、スペースの関係で、全員が一度にゲームをすることは難しい場合が多い。その際、ゲームに出場しない児童は、応援役にまわることが多い。その際、「がんばれ」「いいぞ」という声援ではなく、認識能力を高めるための声援をすることがよいことが明らかになった。

自チームの勝利に向かい、「右だ」「左だ」「奥だ」などの体育の共通言語用いながら、味方に指示を出すことは、認識をしているかどうかの評価にもつながる。さらに、このように声援を送っている児童の、形成的授業評価を見ると学習への意欲や学習への成果認識も高い傾向もうかがえる。

5. まとめ

成果

本時(単元)でどのような力を身に付けさせたいのか(学習内容)を明確にし、そのための手立て(方法)を充実させることにより、体育的学力

を高めることができた。

課題

体育的学力に対する内容と方法のつながりは明らかになってきているが、そこに児童の学びに対する目的のたせ方を載せ、さらに意欲的に取り組ませるための手立てを明らかにしていかなければならない。

何を、どの学年で、どの順番にというスコープとシーケンスの整ったカリキュラムの開発を行わなければならない。

謝辞

日常の議論を通じて多くの知識や示唆を頂いた附属小学校教職員並びに、附属中学校教職員の皆様に感謝します。